

図1. 桜島大正噴火以降の活動の推移（東京大学地震研究所 [課題番号：1407]）
大正噴火以降約30年周期で大きなイベントが起こっており、それぞれの噴出量は $2 \times 10^8 \text{ m}^3$ である。

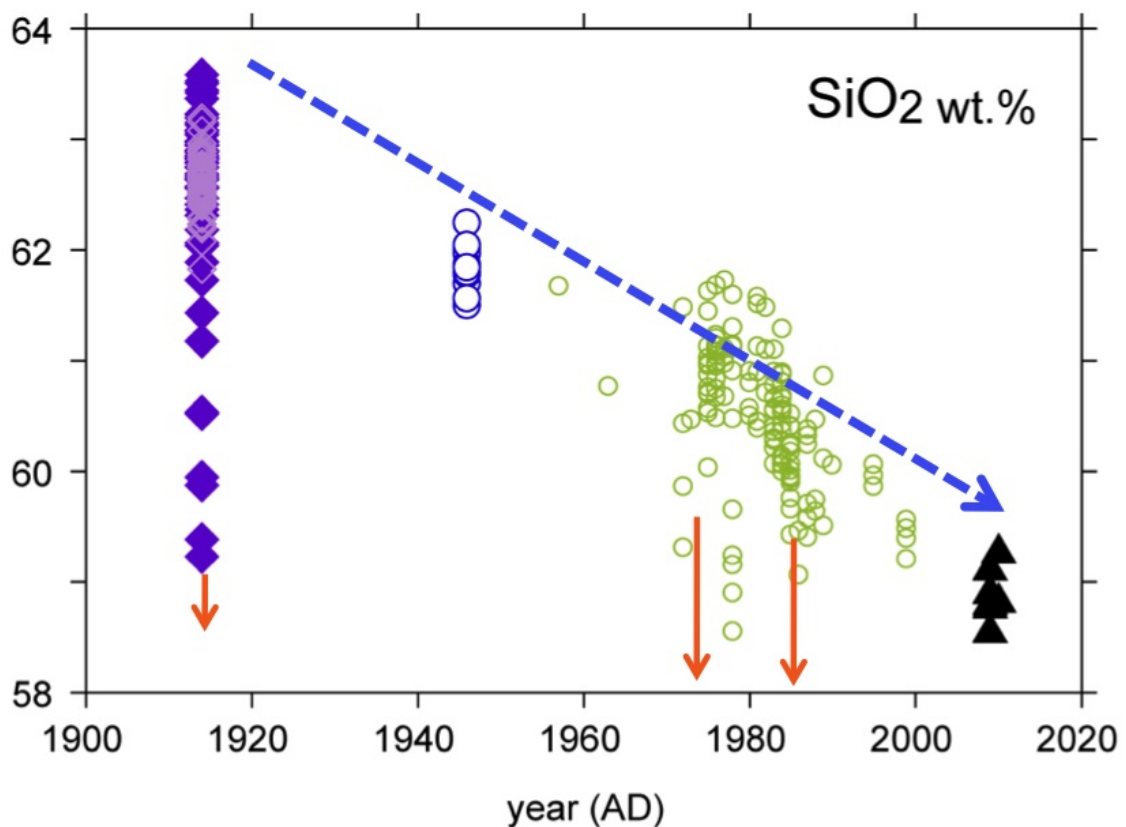


図2. 桜島火山における火山噴出物中マグマ物質のSiO₂量の時間変化（東京大学地震研究所 [課題番号：1407]）大正噴火後、マグマの組成は玄武岩質マグマの関与によって次第に苦鉄質になっている。それぞれの噴火において玄武岩質マグマの関与が本質的であると理解される。

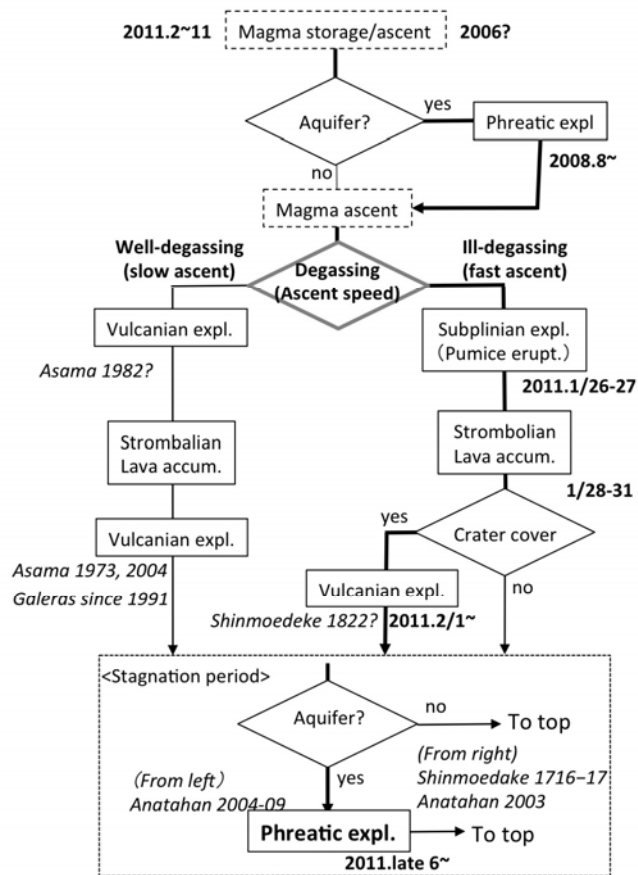


図3. 新燃岳の噴火シナリオ第3版（東京大学地震研究所 [課題番号：1408]）

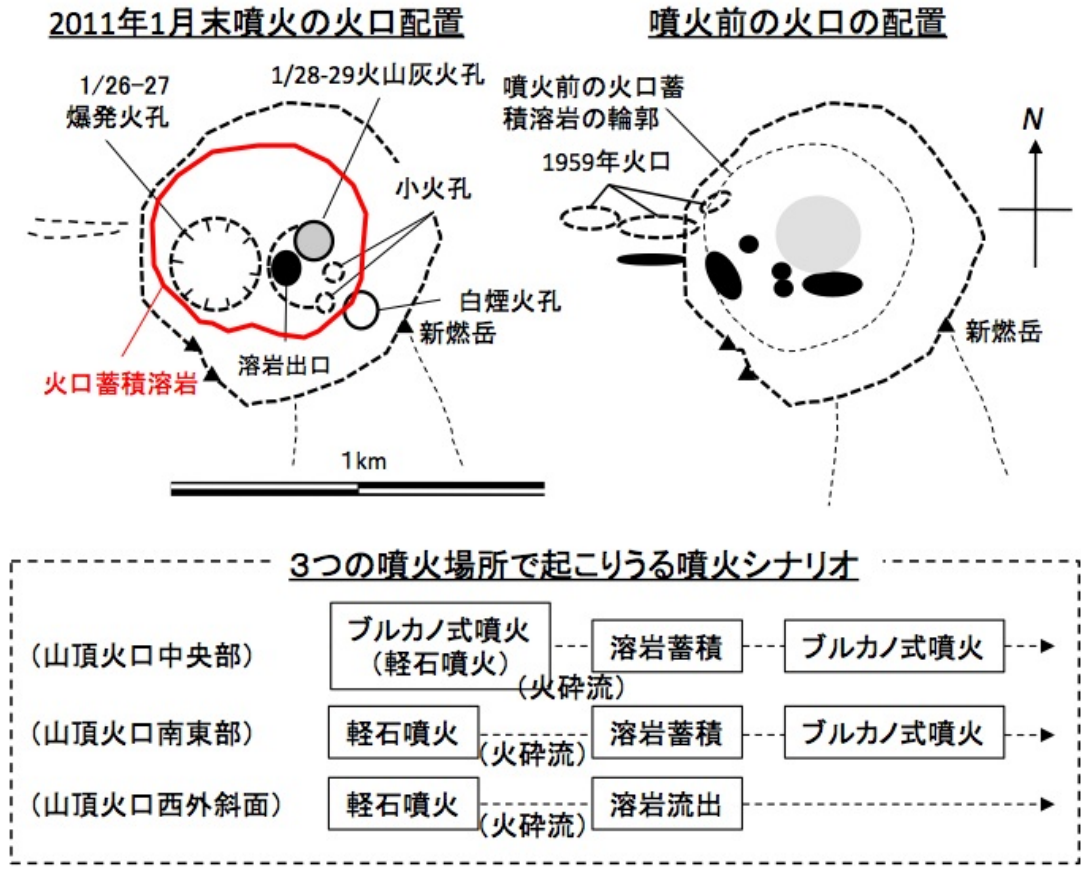
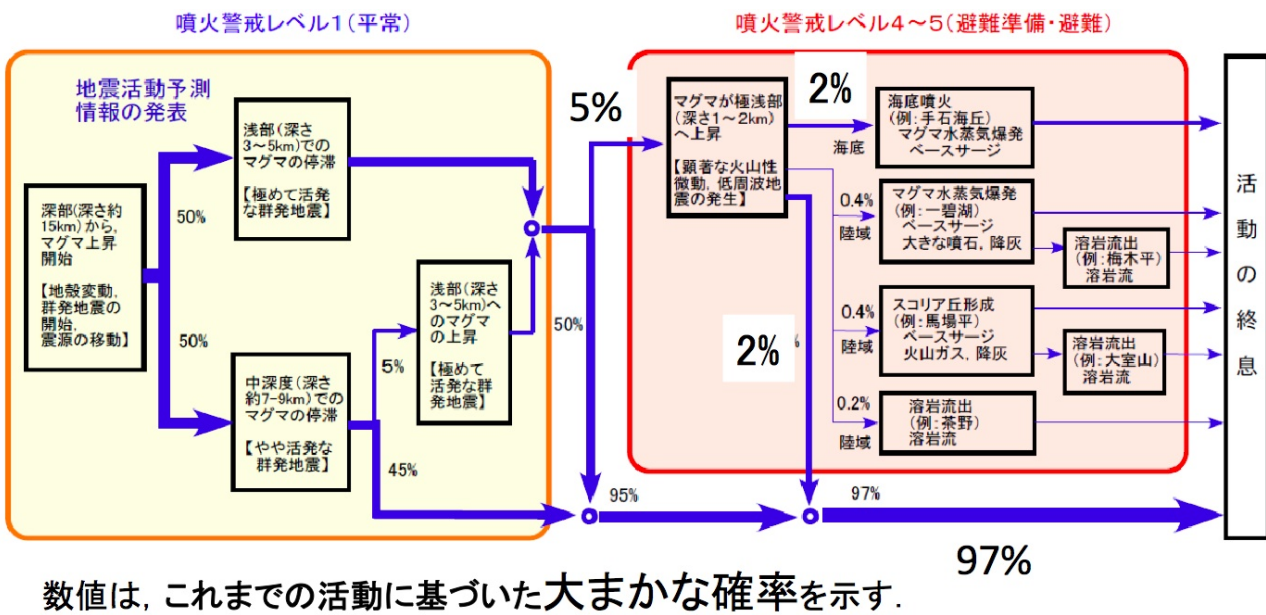


図4. 新燃岳の2011年噴火前後の火口分布図（上）と噴火位置を考慮した噴火様式と推移（下）（東京大学地震研究所〔課題番号：1408〕）



数値は、これまでの活動に基づいた大まかな確率を示す。

図5. 東伊豆火山の噴火シナリオ（群発地震発生時の噴火事象分岐図）（東京大学地震研究所〔課題番号：1408〕）